

耳で聴く落語・文字で読む落語<続篇>
これも落語で学んだ雑学

<1> 美人の定義

「髪は烏の濡れ羽色、額は三国一の富士額、眉毛は三谷の三日月眉毛、鼻筋通っておちよぼ口・・・。
言葉遊びではあるが、美人の定義のようなものが語られていたことを子どもの頃に落語で知った。
烏の羽は黒いと思っている人が多いが、実はそんな単純な色ではないようだ。烏の羽には独特の油性の成分が付いていることによるのだろうか、光りのあたり具合や見る角度によっては、青く見えたり紫に見えたりする虹のような微妙な輝きを持っている。「緑なす黒髪」と言う言葉があるように、美しい女性の髪の色は真っ黒ではなかったようで、光りに輝いて七色に変化するものを言ったのかもしれない。だから「烏の羽が濡れた時の光り輝き」が言われたのだろう。

男性がオールバックのヘアスタイルにすると、毎日櫛を入れている内にどんどん額の面積が広がっていく。額に前髪がバサッとかぶったようなヘアスタイルが多い昨今ではちょっと想像もつかないかもしれない。昔の女の子は、子どもの頃には髪を前に垂らしているが、成長すると「髪を結う」というスタイルになるため、額が出てしかも剃りも入る。その結果として額は広がり、「額のかたち」は顔立ちのアクセントポイントになる。こんなことから「三国一の富士額」が生まれたのかもしれない。しかしそれがさらに進行して行くと、志ん生の落語にしばしば登場する「額が禿げ上がって目尻が落ちて・・・飯を食うと顔じゅうが動きやがる」ということになってしまう。

昨今太い眉毛が流行ったり、細い眉毛がはやったり、女性の化粧や美容のはやりは商業主義に翻弄されている。昔は眉を剃り落として眉墨で描いたようだから親から受け継いだ立派な顔をいじくりまわすのはいつの時代も同じなのかもしれない。

「まゆげはさんやのみかづきまゆげ」と耳で聴いて、山谷に月見の名所でもあったのかなと勝手に想像していた。ところが書物に載っている文章を見たら「眉毛は三谷の三日月眉毛」となっていたので、この場所は山谷ではないことがわかった。「東京の地名由来辞典」を調べてみたら、杉並区の井草あたりと目黒区の碑文谷あたりに三谷（さんや）という地名があったことがわかった。目黒の三谷付近は崖状の地形が多く、江戸の名所を示す資料には広重などの画家の手による雪見や花見の絵がいくつも載っていた。江戸の殿様が馬で遠乗りに出かけて秋刀魚を食べたという噺もあるぐらいだから、目黒は景勝の地であったに違いない。従って「眉毛は三谷の三日月眉毛」は目黒の三谷なのだろうと、勝手に結論を出すことにした。

美人に関する論評に戻るが、七五調の語り口を取り込んだ四代目柳亭痴楽はさらに、「立てば芍薬座れば牡丹・・・」と進み、「おとめのすがたしばしとどめん」となり、「けふこのへににほひぬるかな」まで行き、大きな笑いをとっていた。

<2> 家をほめる

「牛ほめ」という落語の中での出来事。与太郎が新しく家を建てた佐兵衛のところへ行くことになり、父親から「新居を褒める」お世辞の言い方を教えてもらう。近頃では新建材が使われたり、妙に西洋風になってしまっていて「立派な家の定義」が変わってしまったが、和風建築しか存在しなかった時代には立派な家が備えているものはどんなものだったのかを教えてくれるのがこの噺。親父が与太郎に丁寧に教える褒め言葉は、「結構な御普請でございますね。普請は総体桧造りで、天井は薩摩の鶉木目。左右の壁は砂摺りで、畳は備後の五分縁でございますね。お床も結構、お軸も結構。お庭は総体御影造りで・・・」

子どもの頃に「普請場へ行ってかんなっ屑もらってこい」なんて言われて風呂の炊き付けを手に入れるのを手伝った記憶がある。大工さんが仕事しているところを普請場と言い、家を建てることを普請と言ったし、安くあつらえた家のことは「安普請」と言った。しかし普請という言葉はあまり耳にしなくなってしまった。物置や塀などには杉板が使われただろうが、金まわりの良い人の家では要所には桧も多く使われており、「普

請は総体桧造り」は自慢すべきもので、それを褒められることは大変心地よいことだったのだろう。

左右を見回して桧造りを褒めた後で、ふと見上げると天井の板の模様が目に入ってくる。

鶉の羽の模様のような細かな波模様が入っている板を鶉空（うずらもく）と言い、屋久杉・薩摩杉や赤松の古木が多いらしい。作ろうと思って作れるものではなく、製材の結果このような模様が出る板ができると珍重したらしい。「天井は薩摩の鶉木目」は、料亭の立派なお部屋や旧家で天井を見上げて見つけたことがある。近頃では壁には合板を使いその上に塗装しているか壁紙を貼っているかという家が多い。ところが時代は一周したようで、最近土の壁やその中に何かを混ぜたりして「呼吸する壁」「体に良い壁」を試みる方も増えて来ており、漆喰や漆喰に珪藻土を混ぜた壁も登場してきているようだ。

「左右の壁は砂摺り」、訪問先の家でうっかり壁に手が触れて擦って足元に砂が散りハッとした経験がある。メートル法が導入されたことや原材料や建築技術が海外から入ってきたことで家屋の造りは著しい変化を遂げてきた。その結果、昔ながらの日本風の家は珍しくなってしまうし、一見純日本風の佇まいであっても造りはツーバイフォーであったりする。畳床にポリスチレン等が使われたり、畳表に合成樹脂のシートが使われたりで、世の中はさらに激変の途上にあるのが現状である。

我が家のようにコンクリート造りの家に住んでいると、昔の日本風の家造りとは異なる所が沢山ある。コンクリートで仕切られた空間におさまるような、現場合わせのサイズの畳が作られている時代なので、家ごとに部屋ごとに畳のサイズは異なるのが普通になってきた。

我が家の畳の大きさは団地サイズと言われるサイズで、長さ 170～175.5cm・幅 84～85cm、縁を測って見たら 3cm だった。五分の縁と言うとこの約半分の 1.5cm 位ということになる。

「畳は備後の五分縁」、備後の藁草で作られた立派な畳で、幅五分の縁には複雑な模様の刺繍が施されていたのかもしれない。

広く立派な庭を持つ家を作る人は今ではあまりいない。土地の値段が高いので、僅かな面積の土地に少しでも部屋数が多い家を作ろうとする人が多いので、庭を広く確保したりその中にお金をかけるのはごく一握りの人だろう。今や、観光地などで古い由緒ある建造物の見学などをすると見ることができる程度のもの、それが「お庭」である。「お庭は総体御影造り」、佐兵衛さんは富裕層の方だったのかもしれない。

さて、落語の主演与太郎さまはこれだけの内容の「家ほめ」を教わったとお見事にやってのけた。

「家は総体尻の木造り」と言ったり「家は総体火の子造り」と言ったかと思うと、「佐兵衛のかかあは引きずり・・・」とかました後、「天井はサツマイモとうずら豆」、「畳は貧乏でポロポロ・・・」と行き、挙句の果てが「お庭は総体見かけ倒し」とまで。

この落語は「牛ほめ」なので、ここまでの話は前置きになる。家を散々褒めまくった（？）後で牛小屋に入って教わった通りに牛を褒めて落ちに入る。この間の流れは本物を聴いて戴くとして、「褒められるような立派な牛とはどんな牛か？」がここで語られているのでここに記しておくことにする。

「天角地眼一黒鹿頭耳小歯違」、これは菅原道真が可愛がっていた牛の特徴で、「角が天を向き眼は地を睨む」「顔に一点の黒、鹿のように滑らかな頭から首」、「耳は小さく歯は上下互い違い」ということらしい。

< 3 > 孝行糖の本来

ラジオで聴いた二代目三遊亭金馬の「孝行糖」が私にとっての孝行糖との初めての出会いかもしれない。頭の弱い与太郎だが、永年の親孝行が認められてお上から五貫文を戴く。今後の生活の安定のためにと、町内の者達が力を貸してくれた結果、戴いたものを資金として商売を始めることになった。始めた商売は飴屋、取り扱う商品は親孝行の報奨が元手なので「孝行糖」と名付けた。

明治の初めに大阪に実在した飴屋を取材してできた上方落語がその発祥らしい。落語となった時に、どこまでが実話でどこまでが作り話だったのかは定かでないが、時代を現代に置き換えてみると極めて重要なことを示しているように感じる。

ちょっと知恵遅れではあるがきちんと親孝行を積み重ねて暮らしてきた男が公的な機関から表彰される。社会的にはややハンディがあるこの男が将来にわたって安定した暮らしを営むことができるようにと知恵を絞ってくれる町内の人たち。

与太郎が太鼓と鉦を叩きながら売り歩く口上、高校時代に暗記して披露し自慢しあったものだ。

「こうこうとう、こうこうとう、こうこうとうのほんらいは、うるのこごめにかんざらし、かやーにぎんなん、にきーにちょうじ、ちゃんちきちんすけてんてん。むかしむかしもろこしの、にじゅうしこうのそのなかに、ろうらいしーといえる人、おやをだいじにしようとして、こしらえあげたるこうこうとう、たべてみな、おいしいよ、またうれたったらうれしいね」

耳で聴いているだけだと「面白い！」だけで通り過ぎてしまうので、ある日書で読んでみた。

「うるのこごめ」は「粳米（うるちまい）」の「小米（精米した時に砕けてしまった屑米）」のことで、それを「寒ざらし」したものが原材料だったことがわかる。

「榧（かや）の実、銀杏（ぎんなん）」という油っ気と香りがある木の実を入れて、さらに香辛料として「肉桂（ニッキ）と丁子（ちょうじ：クローブ）」を入れたと語っている。榧と銀杏はどのように加工したのかよくわからないが、餡に入れるということは割る・砕くまたは挽く等の工程を経て使ったと考えられる。

中国の「二十四孝」は後世への範を示すものとして、親に孝行をした立派な人を二十四例挙げている。その中の一人である老萊子（ろうらいし）と言う人は、自分が 70 歳の老人になっても「老いた所を親に見せず安心させたい」と思って、子どものような服装で子どものような行為をしてみせたという。

二十四孝を引用した落語は他にもあるし、落語に限らず親孝行と親不孝との対比を素材とした話は昔から万人の共感を得やすい物だったのだろう。

子どもの頃に口にした「ニッキ餡」を思い出しながら、この研究はこれで終わりにする。

以上